

第五章 指示詞から感動詞への意味拡張

—抽出化による文法化—

5.1 はじめに

第四章で指示詞から接続詞への拡張関係を検討した。接続詞の基本的機能は文と文のつながりを表す故、具体的に先行対象を指すという指示（照応）機能はテキスト的接続機能に変わっている。

そして、文法化の結果として、意味の希薄化（漂白化）はもちろん、形態的变化も伴っている。さらに音韻的に変化が起こる場合もある。

また前後文脈の関係を明らかにすることで、話し手の聞き手に対する話の前置きとして使われたり、聞き手が話し手に話の続きを催促する継続要求として使われたりすることができる。つまり、接続詞はテキスト的機能以外、Traugott (1989) Hopper & Traugott (1993)、で提示されたモデルのように、話し手の意図や心的態度も表す（表現的機能）こともできる。

(1) 叙述的 (propositional) → テキスト的 (textual) → 表現的 (expressive)

そして、接続詞と違う指示機能が曖昧なコソアとして、もう一つが考えられるのは、以下のような「コソアを含む感動詞」である。

- (2) a. これ! だめじゃないか。
b. それ! 行け。
c. あれ! 財布がない。
d. あの一、すみません、駅はどこですか。

「コソアを含む接続詞」と「コソアを含む感動詞」の違いについて、意味的に、両者とも具体的な指示対象を持たない点で共通するが、形式と機能の面で違っている。

まず、両者には形態の違いがある。「コソアを含む接続詞」は「ソ+X（助詞）」の形式が基本的であるのに対し、「コソアを含む感動詞」の場合は、普段助詞や接辞などに接続しない¹。促音 (eg. あれっ)、長音 (eg. あの一)、末尾音節の重複 (eg. あれれ) といった音形上の異形態が見られるが、何れも特殊音節の付加であるため、これらは異形態と見なす。また、意味を強化するための畳語形式 (eg. あれあれ) も存在する。

機能面での違いは、接続詞は文と文の接続関係を表すのに対して、感動詞は主に、話し手の一時的感動を即座に表すので、文脈指示を介さず（テキストの構成とは関わらない）、現場状況に依存するのが普通であろう。

¹ 本論では「コソアを含む感動詞」を「これ、それ、あれ」や「この、その、あの一」といった単独な形式を中心的に論じているが、「コソア+X」という形式の感動詞が存在しないとは言っていない。たとえば、感動と感嘆を表す「これはこれは」「それはそれは」などがある。

コソア型感動詞の意味拡張は接続詞の拡張プロセスと区別する必要がある。本論をはじめめる前に、次のようなプロセスを確認しておくことができるだろう。

(3) 叙述的→→表現的（話し手の心的態度）

「コソアを含む感動詞」の特徴について、大まかに以下の三つにまとめることができる。

- ①具体的な指示対象が存在しない。（接続詞にも感動詞にも共通）
- ②他の成分と結合するのではなく、単独で句になる（感動詞の特徴）
- ③対他的感動詞」と「非対他的感動詞」があるが、談話に表れる場合が多いようである。どちらも話者の気持ちが伝えられる。（感動詞の下位分類）

しかし、同じ感動詞に属している「これ・それ・あれ」と「この・その・あの」は厳密的に言うと、違うところもある。

話者の一時的な感動を表す「それ」「あれ」が対他的な使い方と非対他的な使い方があるのに対して、言い淀みの「この・その・あの」は何れも、話し相手の想定が必要である。

辞書的意味を調べると、感動詞「これ」は「人に注意を与え、また、呼び掛ける時に発する語」（例2a）で、「それ」は「励ましたり、注意を向けさせたりする時、掛け声のように発する語」である（例2b）。また、「あれ」は「驚いた時、不審に思うときに発する声」である（例2c）。

それぞれ、別の語に置き換えられないのはごく当たり前のことであるが、感動詞の「これ・それ・あれ」が何故このような意味を持つようになるかが問題である。

指示詞としての「この・その・あの」は連体詞であり、後ろに名詞が後接しなければならない。辞書的な解釈で、フィラーにおける「この（一）、その（一）、あの（一）」はどちらも言葉がすらすら言えない時に発する言い淀みである。これらは互いに置き換えられるように見えるが、実際、(2d)の場合のように、「この（一）」「その（一）」と置き換えられない例も多い。本論では指示詞から感動詞への拡張関係に注目し、焦点を以下の二つに絞りたい。

- ①コソアを含む感動詞の機能。
- ②指示詞とコソアを含む感動詞の連続性。

5.2 コソアを含む感動詞の先行研究

5.2.1 感動詞の位置付け—詞辞未分化の句—

時枝（1950）は語を「詞（事柄の表現）」と「辞（話し手の立場の直接表現）」の二つに分類している。そして、感動詞について、以下のように述べている。

感動詞は、感歎詞、間投詞とも云われ、話手の感情や呼びかけ応答を表現する語である。感情、呼びかけ、応答の表現ではあるが、これら話手の思想内容を具体化したり、概念化することなく、直接的に表現するものであるこ

とに於いて、これを辞の一種と見ることができる。(時枝 1950:178)
 しかし、感動詞で表す「辞」は実際、時枝が定義している「辞」と異質のところもある。

その点について、時枝は感動詞が他の辞と異なることは、感情、応答の志向対象となる事柄の表現を伴わずに、それだけで独立して表現されるため、主客未分の表現であると考えている。

感動詞は事柄の表現ではない故、辞の範疇に数えられないのは当然であるが、助詞や助動詞などのように、事柄と事柄との関係を表したり、事柄に限定を加えたり、事柄についての判断を示している表現でもなく、主体と客体とが分化していない表現である。感動詞は詞的要素と辞的要素の融合体である。鈴木(1973)は上述の理由で、感動詞の類を詞辞未分化の句に分類している。

本稿でも、感動詞は他の詞に付加することなく単独で存在できるという理由で「詞+辞」の融合体(=句)という時枝や鈴木などの見方を支持するが、感動詞が単独で話し手の心的態度を表せるかどうか、また、それぞれの機能については、まだ下位分類する必要があると考える。

5.2.2 感動詞の機能

感動詞の分類について、森田(1973:182)は感動詞を機能の面から分類して、「詠嘆を表わすもの」と「呼びかけ、応答を表わすもの」とに、また表現成立のあり方から、「自己の中心を表出するにとどまるもの」と「聞き手への伝達を意図している発話」とに分けている。そして、それぞれを「融合型」²「対立型」とも呼んでいる。

田窪・金水(1997)は発話の心的操作の観点で、応答詞・感動詞類を「入出力制御系」と「言い淀み」に分けている。その中の「入出力制御系」は森田の「詠嘆、驚愕」「呼び掛け、応答」とほぼ一致する。つまり、感動詞が担う機能は少なくとも①驚愕、詠嘆 ②呼び掛け、応答 ③言い淀みの三種類があると考えられよう。

森山(1996)の他者との関係の観点からの分類を加えると、感動詞は表1のようにまとめることができる。

表1：感動詞の種類

種類	森田(1973) 鈴木(1973)	森山(1996)	田窪・金水 (1997)
①驚愕・感嘆	詠嘆を表すもの (融合型)	非対他的感動詞	入出力制御系

² 森田(1973)の説明によると、融合型は聞き手も話し手と同じ心情視点に立つ一体感的意識に根ざす言表で、対立型は、聞き手との間に心理的距離を持ち、話し手と対立する関係にある意識に根ざす発話である。

②呼び掛け・応答	呼び掛け応答を表すもの（対立型）	対他的感動詞	
③フィラー			言い淀み

5.2.3 感動詞の意味の広がり・連続性

森田（1973）は感動詞の発生順序を考察し、感動詞が融合型の音声的感動詞（詠嘆・驚嘆・驚愕など）から対立の感動詞（呼びかけ、応答など）へ発展してきたとしている。具体的には、(4)のような順序が見られる。

(4) 感動→驚嘆→驚愕

驚嘆→呼び掛け

疑問・当惑→勧誘・命令

承諾と肯定応答→否認と否定応答

山口（1984）も感動詞の意味を示すには、感動・呼び掛け・応答・反問・挨拶・繋ぎ詞・囃し詞を区別している。そして感動から挨拶まで、お互いに意味の連続性や重層性があると考えている。筆者は森田が提示する派生順序を基にして、感動詞の意味の広がりを以下のようにまとめる。

(5) 典型的な感動詞の意味の広がり

詠嘆→驚嘆→驚愕

▲ 呼びかけ→注意→動作発動の促し

▲ 命令・禁止

▲ 疑問・当惑→勧誘→命令

▲ 応答→あいづち・肯定応答・否定応答

一方、言い淀み系の感動詞は感動や詠嘆からの派生とは考えにくい。そもそも、言い淀みの主要な機能は話し手が次に来る話を思い付くまでの間つなぎ、時間稼ぎである。これは、聞き手に対して、「後にまだ言いたいことがある」「これからある言いつらいことを言う」というような意図を伝える前置きにもなるが、中心的には間つなぎの付加的な機能であると考えられる。本稿は感動・応答類の感動詞を典型的な感動詞と呼び、言い淀み類を非典型的な感動詞と考える。

(6) 非典型的な感動詞の意味の広がり

言い淀み→【話し手の情報処理】時間稼ぎ→発話権の保持

▲ 【対人関係】聞き手の注意を引く→注意喚起

▲ 【語用的機能】言い辛いことがあると聞き手に伝える→前置き

5.2.4 「さあ」と「それ」の違い

森山・張 (2002) は、同じく動作発動系の感動詞「さあ」と「それ」の相違点を分析している。

まず、「それ」と「さあ」のいずれも、動作発動を誘発する機能を持つ。

(7) 「さあ、早く御挨拶をなさい。」(太宰治『浦島太郎』: 森山・張 2002)

(8) それ、行こう。出番だ。(森山・張 2002)

また、動作発動と関連して、否定や禁止といった動作の不在を表す文に接続しない点で両方も共通している。

(9) [*さあ/*それ]、行くな。(森山・張 2002)

「さあ」「それ」はともに動作発動を促す掛け声であるが、以下の例で「それ」は「さあ」より同一時間性を要求する表現と言えよう。

実行までに比較的時間がかかる場合、「さあ」が許されるが、「それ」はかなり言いにくい

(10) [?それ/さあ]、そろそろ出発しよう。(森山・張 2002)

それに現場での動作という文脈から離れた用法では、「さあ」は何らかの行動に結びついた時機到来を表す場合など、動作実行ということが潜在化しているから許されるが、「それ」は用いにくい。

(11) [*それ/さあ]、食欲の秋だ。(森山・張 2002)

また、「さあ」には「疑念」や「回答保留」など「動作発動」ではない用法もある。

(12) 「[*それ/さあ]、わかりませんねえ。何せ、おおぜいの人ですから。」
(太宰治『津軽』: 森山・張 2002)

(13) 「[*それ/さあ]、どうしてかしら？」(森山・張 2002)

田窪・金水 (1997) では、「それ」に関連して、「そら」は「ほら」と同様に気付かせ・思い出させの機能があるが、「そら行け」のような命令文とともに用いる用法があると考えている。「それ」の場合、現代語では気づかせ・思い出させの機能はすでに希薄であり、専ら命令用法に偏るが、気付かせ・思い出させと命令とは、指示という用法を介して繋がっている。

(14) それ、見よ。(田窪・金水 1997)

例 (14) の「それ」は指示であるが、対象物への気付かせへと読み替えることができる一方で、命令の予告とも読みかえることができる。

5.2.5 「ええと」と「あの (一)」の違い

定延・田窪 (1995) では心的操作標識³「ええと」「あの (一)」の用法を細

³ 定延・田窪 (1995) では言語表現を、話し手の心内に貯蔵されている情報データ自体に関わるものと、話し手の心的操作に関わるものと大きく二つに分けている。後者は感動詞、終助詞、接続(助)詞の類を指す。

かく分析している。

まず基本的用法について、定延・田窪は「ええと」を、「話し手がいったんこの予備的な心的操作に入っていること（入りつつ、当該の検索や計算を行っていること）を表す」と定義している。それに対して、「あの（一）」を「話し手が言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作をおこなっている際に用いられる。」としている。

すなわち、両者とも話し手の心的操作に関わるが、「ええと」の方が「あの（一）」に先行するという違いがあると考えられる。

そして、両者がともに使われる場合、「モノの名前を思い出そうとする」時を取り上げている。

(15) 一郎：今度の映画の監督って、誰だっけ？

次郎：[a. ええと / b. あの（一）]、レナード・ニモイ。

定延・田窪は「モノの名前を思い出そうとする」過程を、まずモノ自体（例15の場合「レナード・ニモイ」の何らかの人物イメージ）を検索し、次にその名前（「レナード・ニモイ」という人名）を検索するという二段階に分けている。「ええと」は第一段階の検索の時に発せられ、「あの（一）」は第二段階の検索に用いられるとしている。

その証拠として、次の例は「ええと」の方が自然であるが、「あの（一）」はそうではない。

(16) 一郎：今度の映画の監督って、誰だっけ？

次郎：[a. ええと / ?? b. あの（一）]、ああ、『スター・トレック』でスポックやった人だ、レナード・ニモイ。

次の発話開始時点では、モノ自体にさえ到達できていない故、「ええと」が使われる。

「ええと」が「あの（一）」の前の段階に来る証拠は、「ええと」しか使われない次の三つの場面を見れば分かるだろう。

①対話中に相手や第三者の発話によって獲得された新規情報

(17) で、あなたがさっき私に写真を見せてくれたお方、何と仰るんでしたかねえ、[a. ええと / ?? b. あの（一）]ズルヌラインさん？その方もパーティーにお呼びするようにね。（定延・田窪 1995）

②計算を行う時

(18) 一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：[ええと / ?? あの（一）] 3579。（定延・田窪 1995）

③独り言を言う時

(19) （本をさがしていながら独り言⁴）

[a. ええと / ?? b. あの（一）]、僕の本はどこだっけ。（定延・田窪 1995）

⁴ 例（15）は独り語に限定される。独り言でない場合は、「あの（一）」も用いられる。

例 (17) の新規情報と (18) の計算の場合、発話当時、話し手がこれから話す内容について、まだ把握できなく、もの自体にさえ到達できない故、発話形式を検索する「あの」が使われないのである。

この点において感動詞「あの (一)」は、「話し手の過去経験を指示する」や「話し手と聞き手の共通体験を指示する」などという指示詞「あの」の機能と連続していると考えられる。また「対話中の第三者の発話によって獲得された新規情報」は、指示詞「あの」で指せないのと同じように、フィラーの「あの (一)」にも用いにくいと考えられる。

次は「ええと」より「あの (一)」の方が自然な使い方を見てみよう。話し手が「あの (一)」を用いることにより、発話形式に気を配っている態度を表出し、結果として発話の丁寧度が増えることに繋がる。

①依頼⁵

(20) [# φ / #ええと / あの (一)] 窓を開けてもらえますか。

②相手の明らかなミスを指摘

(21) 先生、[# φ / #ええと / あの] ズボンのチャックが開いていますよ。

③相手の発話の遮り

(22) [# φ / #ええと / あの (一)] 田中さんからお電話ですが。

田窪・金水 (1997) では主に定延・田窪 (1995) の結論に従っているが、「あの (一)」と「ええと」では丁寧さと後続発話内容予測に違いがあるとも考えている。

たとえば、人に話しかけようとしたり、言い訳をしたりする場面では、「あの (一)」が多く用いられると言えよう。「あの (一)」を使うことによって丁寧さが感じられるのは、相手のことを顧慮し、より適切な表現を選ぼうとしている態度を示すことが感じられるからである。

(23) 心理療養師：緑の丸はイメージできましたか？ではそこに四角の穴を開けてください。

患者：a、ええと、……

b、あの一、…… (田窪・金水 1997)

(23 a) (23 b) の後にくる発話内容の予測について、田窪・金水 (1997) では「ええと」の場合は患者は言われたとおりの操作を行って、「四角い穴ですね。」とか「できました」などというであろうと予測する人が多いと考えている。それに対して、「あの一」の場合は、「すみません、うまくいかないん

⁵ 定延・田窪 (1995) は第二の発話 (応答部) の場合、「ええと」も発話の無礼さを減殺する効果があると考えている。返事に途惑うという慎重な態度を表すことができる。(eg. A：ついでにこの荷物も送ってもらえるかな。 B：{ええと / あの一} それはちょっと無理ですが)

です。」とか「こんなことして何になるんですか」など、相手の意図に反するような応答が予測されやすいとしている。

以上、感動詞の種類、意味の広がりとコソアを含む感動詞の研究を概観したが、コソアを含む感動詞については、管見の限りでは、指示詞との連続性の観点から指示詞を含む感動詞の機能を分析する先行研究はそれほど多くはないようである（定延・田窪 1995、田窪・金水 1997 などがある）。以下は指示詞を含む感動詞を「これ、それ、あれ」と言い淀みを表す「この（一）、その（一）、あの（一）」に分け、それぞれの機能及び指示詞との関わりを考察したい。

5.3 指示詞から感動詞へ—これ、それ、あれ—

5.3.1 感動詞「これ」

感動詞「これ」の特徴の一つは、指示対象を持たないことと言えよう。下の用例から見ると、「これ！」「これっ」「これ。」「これこれ！」といった単独で表れる場合が多い。

指示機能が曖昧な感動詞の「これ」は主に「聞き手の注意を引く」用法である。後ろに来る文は、「呼びかけ」、「命令」、「禁止」、「叱責」などが多いようである。

①これ+呼びかけ

(24) 「これこれ、読売り。」

「一枚くれ。」

「はい、有難うございます」

覆面した浪士体の二人連れの侍が、読売りを呼び留めてその一枚を買いました。（中里介山『大菩薩峠黒業白業の巻』青空文庫）

②これ+命令

(25) 「これこれ、お起きなさい」

兵馬は、その背中を叩いて、身体をゆすぶると、ようやくにして起き上がったその人は、一見して兵馬もそれと知る長者町の道庵先生でしたから、あいた口が塞がりません。（中里介山『大菩薩峠 小名路の巻』青空文庫）

(26) 「これこれ、もうすこし黙っていなさい。……そこで少年たちよ。今後、帝都が空襲されることは、たびたびあろうと思う。（海野十三『空襲警報』青空文庫）

③これ+禁止

(27) これ、そんなことをしてはいけません。（大辞林）

④これ+叱責

(28) 「これこれ、失礼を言うものじゃない」（坂口安吾『ニューフェイス』青空文庫）

(29) 「これこれ何んだ。口の悪い奴だ」(国枝史郎『名人地獄』青空文庫)

例(24)～(29)では、「これ」で担う機能はすでに「ものを指し示す」ではなく、主に話し手の心的態度を表すと言えよう。

「これ」は「もの」を指すより、話し手が呼びかけ、命令、叱責などをするために「聞き手の注意を引く」掛け声であり、感動詞「これ」はすでに話し手の心的態度を表す機能に移り変わっている。

しかし、次のように、「これ」が「指示詞」か「感動詞」か明確に区別することができない例も少なくない。このような中間的な使い方を介して、指示詞の「これ」と感動詞の「これ」は繋がっていると考えられる

(30) 「これこれ、こんなしぶいのはだめだよ。もっとあまいのをおくれよ。」
 と言いますと、猿は「よし、よし。」と言いながら、もっと青いのをもいで、ほうりました。(楠山正雄『猿かに合戦』青空文庫)

「これ」における指示詞から感動詞への心的過程の変化は以下のように、三つの段階が存在すると考えられる。

表2: 「これ」の拡張プロセス

↑ + 指 示 機 能 ↑ ↓ - 指 示 機 能 ↓	【第一段階】 話し手が自分の領域内の <u>もの</u> に気付く 話し手が自分の領域内の <u>もの</u> を指す 話し手が自分の領域内の <u>もの</u> を指すことによって聞き手に気付かせる ↓↓ 【「もの」→「こと」への抽象化】
	【第二段階】 話し手が自分の領域内の <u>状況</u> に気付く。 話し手が自分の領域内の <u>状況</u> を指し示す。 話し手が自分の領域内の <u>状況</u> を指すことによって聞き手に気付かせる ↓↓ 【話し手の縄張りに入る＝方向の抽出化】
	【第三段階】 話し手の縄張りに入る 話し手が聞き手の注目を自分の領域内へ引きこむ 聞き手の注意を引く

第一段階では「これ」で指し示されるものは、具体的に存在するものであり、現場指示の働きが現されている。第二段階は具体的な指示対象から抽象的な指示対象への抽象化過程と考えられる。第三段階では具体的指示機能をなくし、

物事や状態・状況を指すことより、話し手が聞き手に強く意志伝達することが中心的である。

森田（1973）では、感動詞の「これ」は、意識外にあったことが突然意識に上り、驚嘆の対象が突如、自己の意識の内に入り、はっきり気付くという心理過程である。対者意識においては、相手にはっと気付かせる呼び掛けや注意を与える気持ちとして現れると考えている。この点からも、指示詞と感動詞の意味的つながりが見られる。

(31) 指示詞「これ」の機能

話し手が自分の縄張りの中にある物事に気付き、それを指し示すことによって聞き手に気付かせる。

(32) 感動詞「これ」の機能

話し手が積極的に聞き手の注目を自分の領域内へ引き込む。つまり、聞き手の注意を引く機能を有している。

その意味拡張は「指示する→気付かせる→相手に注意を引く（命令・叱責）」の順をなしている。話し手が相手に強く自分の意見を与えるというのは、①すべきことを命令すること、②してはいけないことを禁止または叱責することが含まれる。

話し手が物事を指し示す前提は、その物事に気付くことである。言い換えると、ある事物に「気付く」ことは「指し示す」ことに含まれる。それならば、感動詞の「これ」は、接続詞のような「 $A > A + B > B$ 」（ A = 指示機能、 B = 接続機能）という意味希薄化から派生するのではなく、元々「話し手の縄張りの中にある物事を指し示す」という指示機能の中で、「話し手の縄張りに入る」という方向性だけが抽出されたものだと考えられる。いわば、「 $A (= a_1 + a_2 + \dots)$ 」のいくつかの素性の中から「 a_1 」だけ抽出して派生したものである。（eg. a_1 = 話し手の縄張り、 a_2 = 物事や状況、 a_3 = 指示する、 a_4 = 気付く…）

「相手の注目を自分の縄なりに引き込む」機能を持っている「これ」の方向性を抽出すれば、図1の通りになる。

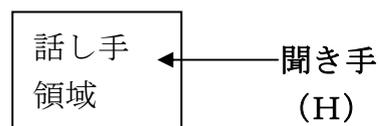


図1：感動詞「これ」の概念図

コ系列は話し手の縄張りとして強く指示することができるから、相手の関心を引きたい時は、相手を自分の縄なりに引き込む役割を果たすコ系語が使われる。また、「注意を与える」程度を強めれば、非難のニュアンスに繋がるだろ

う。基本義との関連性は以下の通りである。

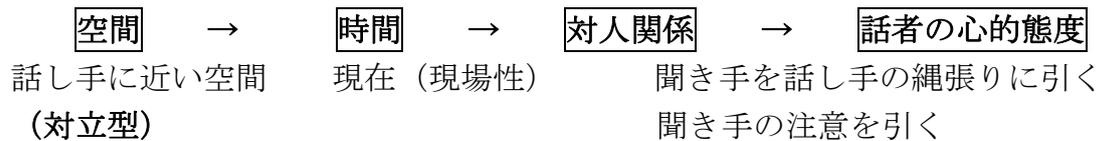


図 2 : 「これ」の拡張

5.3.2 感動詞「それ」

「それ」は「それ!」「それっ」「それぞれ」などの異形態を持っている。指示対象が曖昧な感動詞の「それ」は「動作発動を促す」機能を表している。その下位分類として、「聞き手の動作を促す (励まし、命令)」、「自分の動作を促す 1 (聞き手に注意を与える)」、「自分の動作を促す 2 (未来への動作発動)」に分けることができる。

①聞き手の動作発動を促す (後に来る文は励ましや命令などが多い)

(33) 「たわごとを言うな、それ、行くぞ」神尾主膳は、思い切って金助の横っ面を、ピシャリと食わした。(中里介山『大菩薩峠 勿来の巻』青空文庫)

(34) 「それ、急げ」山岸中尉は、帆村の腕をひっぱるようにして、艇の方へ駆けだした。(天野十三『宇宙戦隊』青空文庫)

②自分の動作発動を促す 1 (相手に注意を与える)

(35) 「そら⁶、燃料点火だ」帆村は、時計を見ていて、一秒ちがわず点火する。エンジンは働きだした。(天野十三『宇宙戦隊』青空文庫)

(36) それ! (ボールを投げる) (森山・張 2002)

③自分の動作発動を促す 2 (未来への動作発動)

(37) 「ばか野郎……そ、その泥足は何でえ……」ぴくりと富次は驚くのであるが、その時彼はえり頸を掴まえられてすでに足洗い場に運ばれていた。

「それ、それ—」と使丁はがなりつける。(本庄陸男『白い壁』青空文庫)

(38) 「それ行け、ワ——ッ」と走り出した。(国枝史郎『剣俠』青空文庫)

「それ、行け」「それ、急げ」など、動作発動を促す「それ」の後には命令文が来る例が多く見られる。しかし、指示詞と感動詞を区別しにくい例も存在する。たとえば、「それ、見て」の場合、「それを見て」(指示詞)と「それ! 見て」(感動詞)の二つの解釈ができる。「それ」における指示詞から感動詞への意味変化も、「これ」と同じ三つの段階に分けられる。

⁶本稿では「そら」を「それ」の異形態とする。

表3: 「それ」の拡張プロセス

十 指 示 機 能 ↑ ↓ 一 指 示 機 能	【第一段階】 話し手が自分の領域外の <u>もの</u> に気付く 話し手が自分の領域外の <u>もの</u> を指し示す 話し手が自分の領域外の <u>もの</u> を指すことによって聞き手に気付かせる ↓↓ 【「もの」→「こと」に抽象化する】
	【第二段階】 話し手が自分の領域外の <u>状況</u> に気付く 話し手が自分の領域外の <u>状況</u> を指し示す 話し手が自分の領域外の <u>状況</u> を指すことによって聞き手に気づかせる。 ↓↓ 【話し手の縄張りから出る＝方向性の抽出化】
	【第三段階】 話し手の領域から出るか聞き手の領域に入る 話し手が未来の動作を促す。(話し手が自分の力を領域外に及ぼす) 話し手が聞き手の動作を促す。(話し手が聞き手の領域に力を及ぼす)

指示詞「それ」の機能は、話し手の領域外または聞き手の領域内の中にある物事を指し示すという「これ」とまったく反対な方向であると考えられる。まず、指示機能を持つ第一段階は、指示詞の機能を果たしている。そして、第二段階は具体的な指示対象が抽象的な事柄へ変化するプロセスである。引き続き、「話し手の縄張りから出る」方向性だけが抽出される故、第三段階では、具体的な指示対象がなくなっている。

(39) 指示詞「それ」の基本的な機能

話し手が自分の縄張り以外の物事に気付く、それを指し示すことによって聞き手に気付かせる。

(40) 感動詞「それ」の基本的な機能

話し手が自分の領域外に力を及ぼす。

他領域に力を及ぼす→動作発動を誘発→【対立型】聞き手の動作を促す。
→【融合型】自分の動作を促す。

その意味拡張は「指示する→気付く→気付かせる→動作を促す」であると考えられる。森田(1973)は、感動詞ソ系統は不可解な事柄、意識のかなたにある事柄、相手の述べた事柄などまだ話し手側にはない事柄として、自己の納得や驚きが相手に対して向けられれば、聞き手への注意の喚起や叱咤激励(対立型)へと転化すると考えている。

指示機能を持つ「それ」は本来、話し手領域外の間接的領域(融合型)と聞

き手領域（対立型）にある物事を指示する役割をしている。感動詞の「それ」は自分以外の領域（間接領域）に力を及ぼすというのが基本的な意味であるが、「聞き手領域」に力を及ぼすと、聞き手の動作を促す掛け声の用法にも連続すると考えられる。

どちらも図3のように「話し手の領域外へ移動する」（他の領域に力を及ぼす）という方向性を抽出することができると言えよう。

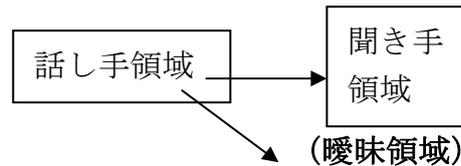


図3：感動詞「それ」の概念図

感動詞の「それ！」は話し手自身の動作の掛け声として発する時もあるが、それは、自分の動作を相手に予告する機能と単純に自分自身への掛け声の二種類に分けられる。

たとえば、ボールを投げる時に、「それ！」と声を掛けたら、相手がボールが飛んでくることに気付き、つまり、「それ！（ボールが）行くぞ」（注意を与える）は「それ！（ボールを）受け取れ！」（命令）の意味に変えられる。「他の領域に力を及ぼす」ソ系語は「注目させる」の外、「あることを相手に注目させて、自分が思うように行動してほしい」という意志も含まれるので、相手の行動を促すことができ、人を励ますことや積極的に「行動しろ！」と命令することにも連続している。

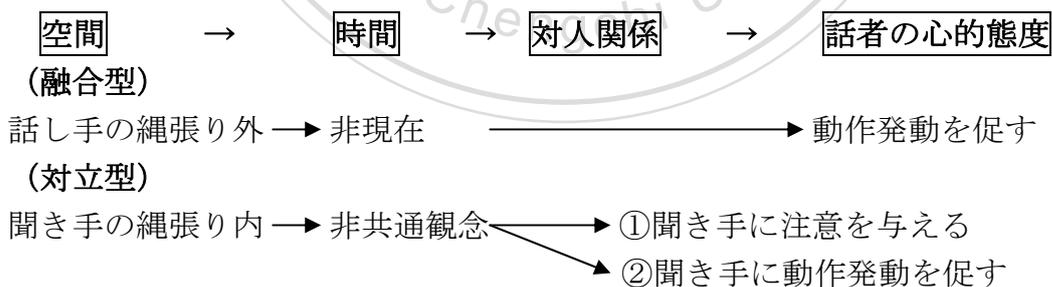


図4：「それ」の拡張

5.3.3 感動詞「あれ」

感動詞「あれ」は、話し手の一時的感動を表す「非対他」の機能が働いている点で掛け声の「それ」「これ」と違っている。主に意外の意を表す感動詞の「あれ」は後続する文脈によって、「感動」、「驚き・驚愕」、「意外・不審」、「評

価」などの意味を帯びることができる。

①感動・驚嘆

- (41) 青木：やあ面白いなあ。まるでナゾナゾの問題だ。これを代数で解けるとは、ますます面白い。まず卵の総数をXと置いて、それから……。
女受験生房子：はい先生、できました。
青木：あれっ、もう出来た子がいるよ。
女教：はい房子さん、出来たんですね。どういう式を立てたか、そこで読みあげてごらん下さい。(海野十三『新学期行進曲』青空文庫)

②驚愕・驚き

- (42) 「綾！来ておくれ。あれ！」と夫人は絶え入る呼吸にて、腰元を呼びたまえば、慌てて看護婦を遮りて(泉鏡花『外科室』青空文庫)

③意外・不審

- (43) 「あれっ、どうかしたよ、この受付は」と、正太は怪訝な顔をしているとき、奥から人波をかきわけながらぜいぜい息を切らせてかけつけた一人の禿げ頭の老人があった。
(海野十三『人造人間エフ氏』青空文庫)

④評価

- (44) 「あれ、あれ、勿体もない。」お糸婆さんは、いかにも勿体なさそうに、そう言って、ぺちゃんこになった折箱を拾いあげた。(下村湖人『次郎物語』青空文庫)

また「これ」「それ」と同じように、指示詞の起源を持つ感動詞は指示詞か感動詞かよく区別できない例も存在する。

- (45) 「あれ何の音？」←会話ではアクセントでわかる。
「さあ……おおかた鋳屋さんで何かやっているんでしょうよ」(宮本百合子『菊人形』青空文庫)

- (46) 「うわー、あれあれ。爆弾だ、爆弾だ」(海野十三『空襲警報』青空文庫)

(45) の「あれ」は「あれは何の音」にも読み替えられるし、変な音を聞いて、不審に思う感動詞「あれ！」にも解釈できる。例(46)の「あれ」も単なる爆弾を指し示すか驚愕の時の感動詞かという二通りの解釈ができる。

指示機能を持つ「あれ」から指示機能が曖昧な「あれ」(感動詞)への拡張プロセスは表で示すように、三つの段階が考えられる。

表4：「あれ」の拡張プロセス

十 指 示 機 能 ↑ ↓ 一 指 示 機 能	【第一段階】 話し手が自分から遠い <u>もの</u> に気付く 話し手が自分から遠い <u>もの</u> を指し示す 話し手が自分から遠い <u>もの</u> を指すことによって聞き手に気付かせる ↓↓ 【「もの→こと」の抽象化過程】
	【第二段階】 話し手が自分から遠い <u>状況</u> （過去の出来事）に気づく 話し手が自分から遠い <u>状況</u> （過去の出来事）を指し示す 話し手が自分から遠い <u>状況</u> を指すことによって聞き手に気付かせる ↓↓ 【話し手から遠く離れている領域を抽出する】
	【第三段階】 話し手が自分から離れた領域のある状況に気付く 話し手が過去経験に矛盾した状況に気付く 話し手が過去経験に矛盾した状況に感動や驚愕を表す

(47) 指示詞「あれ」の基本的な機能

話し手に遠く離れている物事に気付いて、それを指し示す。

(48) 感動詞「あれ」の基本的な機能

話し手が過去経験に矛盾したことに気付き、それに対して感動や驚愕などを表す。

田窪・金水（1997：267）は感動詞の「あれ」の機能は、眼前の状況をまず事実として登録し、その情報が事前に用意された知識データと整合しないことを表明するとしている。言い換えると、「あれ」と「あら」は主に話し手が過去の経験（知識データ、深層記憶）と矛盾した情報に対して発した声である。そのため、聞き手を配慮しない、独り言が多いようである。

過去のある出来事（経験）は現場で出会ったあるきっかけによって、もう一度思い出すことができるが、「あれ？（↑）」⁷で表すのはそのきっかけになる事件が、過去の経験と食い違っていることを表現するのである。感動詞の「あれ」は指示機能を持つア系語の基本的な意味から「話し手に遠く離れている縄張

⁷ 感動詞「あれ」は「これ」「それ」と違って、下降調だけではなく上昇調も使える。田窪・金水（1997）によると上昇調を使う時、眼前の状況が成立するため原因、理由を問う質問文や不審な状況に対する疑惑を述べる文が多い（eg. あれ（↑）なんでそんなことを言うの？）。逆に下降調の場合、「驚き・意外」に引き続いて、評価を下す文が多い。（eg. あれ（↓）酷い。）

り」(＝過去経験)を抽出することができる。また、新しい事実が加わることによって、新しい縄張りを構築することができる。

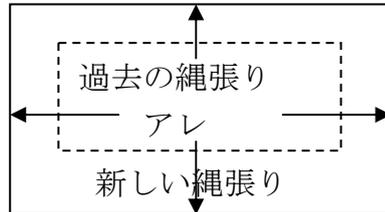


図5:「あれ」の概念図

感動詞の「あれ」の意味拡張は「話し手に遠いものを指す→話し手に遠い状況を指す→過去体験と矛盾した意外」の順番と考えられる。「話し手の過去経験」と関与する点で、指示機能を持つ「あれ」と連続していると言えよう。

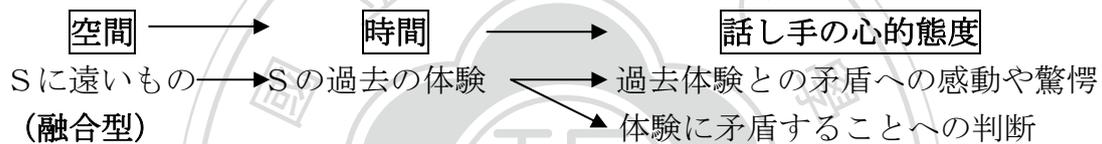


図6:「あれ」の拡張

表5: 感動詞「これ」「それ」「あれ」と時間の関係

	時間	融合型	対立型
これ	現在 (現場認知)		Hの注意を引く
それ	非現在・非過去 (短期記憶)	Sの未来の動作発動を促す。	Hの動作を促す
あれ	過去 (長期記憶)	Sの過去経験に矛盾したことへの驚き・驚愕を表す	

5.4 指示詞からフィラーへ—この、その、あの—

5.4.1 使用頻度の分析—談話の種類による相違—

山根(2002)は講演、留守電、対話、電話の四つの場面を分け、フィラーの使用を考察し、談話の種類はフィラーに影響を及ぼすという結論を出している⁸。また、山根の研究は各談話の場面で使われるフィラー全般の分析であるが、

⁸ 従来の先行研究では、主に談話の種類のカテゴリに対する影響を考慮に入れていない。詳しくは山根(2002)を参照。

コソア型フィラーを探究するのも示唆的である。

山根の研究から、「あの（一）」の使用頻度は講演、対話、電話のいずれの場面も、すべてのフィラーの中で一番良く使われる形式であることがわかる。また、留守番電話と電話における談話の場合、「この」の使用例は見つからないだけではなく、「その」の用例も非常に少ない。表7に表されたのは四つの場面におけるコソア型フィラーの使用頻度である。

表7：コソア型フィラーの使用頻度統計（山根 2002 に基づき、筆者作成）

	講演	留守番電話	対話	電話
コソア型フィラー	1816 (33.1%)	102 (23.1%)	654 (46.9%)	196 (39.9%)
コノ（一）	35 (2%)	0	4 (1%)	0
ソノ（一）	237 (13%)	1 (1%)	124 (19%)	12 (6%)
アノ（一）	1547 (85%)	101 (99%)	526 (80%)	184 (94%)

表7で示されるように、「この（一）」は用例数が最も少ないだけではなく、使用場面も最も限られている。四つの場面の中で、講演と会話には用例が見られるが、留守番電話と電話ではほとんど使われていない。

また、コ系列では「この」より多く使われる「こー」も、留守番電話と電話の使用頻度が極めて少ないことが山根（2002）の研究でわかる。

講演と対話の共通の特徴を考えると、両者とも話し手と聞き手（話し相手）の対面形式の談話である。話し手と聞き手との空間的共有と時間的共有という条件がともに成立してはじめて成り立つ談話であると考えられる。話し手の領域にあるものを示すコ系語を用いて、聞き手を話し手の領域に引き込む機能を有している。その点で、指示機能を持つコ系語の「現場性」から離れていないようである。

広辞苑によると、感動詞の「その」は「言葉が詰った時や口ごもる時などに、次につなぐために挟む語」である。「その」と「あの」の定義には大した差が見られないが、使用頻度は「あの」に遥かに及ばない。

(61) つまり、その、何ですよ。(広辞苑)

「その」は四つの場面で、対話の場合に一番多く使われる（対話（7.7%）>講演（3.4%）>電話（1.8%））のに対し、相手が実際に存在しない留守番電話の場合にはほぼ使われていない。

留守番電話における談話の特徴は聞き手に向かっている発話であるが、聞き手と空間と時間を共有しない故、ある程度、独白に近いと思われる。ソ系列のフィラーは「聞き手が実際に存在する」ことが必要条件ではないかと推測できる。

「あの（一）」は四つの場面のいずれでも使われるが、特に講演のような長

時間発話権を持つ必要がある談話で多く使われるようである。

話し手と聞き手との時空関係から見ると、フィラーの「この、その、あの」の使い分けは、指示機能を持つコソアと類似していると考えられる。

表 8：話し手と聞き手との関係

話し手と聞き手の関係	コ	ソ	ア	代表談話
+空間的共有 +時間的共有 ⁹	○	○	○	講演、対話
-空間的共有 +時間的共有	×	○	○	電話
-空間的共有 -時間的共有	×	?	○	留守番電話

5.4.2 フィラーが担う機能

山根 (2002) は談話の場面でフィラーの分析を行い、フィラーの機能を大まかに次の三つに分けている。

(a) 話し手の情報処理に関わるフィラー (時間稼ぎ、間つなぎ)

(49) (前略) これから 21 世紀へ向けて人類は今の 20 世紀の終り頃からですね 大変な ソノ 傲慢な アノ 科学の研究をやってるためにですね アノ ますます ソノ エ 非人間的な エー そういう世界になっていく しまうんじゃないかっていう若干 ユー コノ 悲観的な ソノ ウー ご意見をですね こん中で アノ 述べてらっしゃる (山根 2002 : 談話資料<<3>>講演 3)

話し手の情報処理に関わるフィラーは典型的な言い淀みであると考えられる。具体的な機能は「時間稼ぎ」「間つなぎ」「話し手発話の調子を整える」などがある。その出現位置は、例 (62) で示されるように、文節の後 (特に助詞の後) に来る場合が多く、また時間を稼ぐために、他のフィラーと一緒に使うことも頻繁に見られる。

(b) テキスト構成に関わるフィラー (挿入、換言、境界、省略、倒置)

(50) H : ナンカ 非常にく ソノ 国際的な臭いっていうのがまず新しいですよね。(山根 2002 : 147 【対話】)

(51) 目標だから言うて 私 アノ 嫁入らず参つたらんよ。(山根 2002 : 68 【講演】)

(52) もしもしー アノ ネ 今日ね たぶん研究室の先輩とのみに行くからー

⁹ 本稿では空間と時間の関係によって、話し手と聞き手が同じ時空に存在する対面形式の談話を「+空間 +時間」とする。これは、指示機能を持つコソアの現場指示の場面に当る。電話における談話の場合、話し手と聞き手は違う場所にいるけれど、同じ時間である故、「-空間 +時間」である。また、留守電の場合、話し手と聞き手の空間だけではなく、時間も共有していないゆえ「-空間 -時間」である。そのほか、山根が提示した談話形式以外、インターネットの掲示板の書き込みなど、「+空間 -時間」の形式もあると考えられる。

たぶん遅くまで帰らないと思います。(山根 2002 : 105 【留守番電話】)
 (53) M : そいで どういうコースがお望みかな アノ 半日岡山観光は
 N : イヤ なんでもいいよ (山根 2002 : 184 【電話】)

例 (50) ~ (53) はテキスト構成に特別な役割を果たしているフィラーである。(50) は「非常に」と「国際的」の間に発話修正の機能をしている。(51) の「あの」は元の助詞の位置に来る故、「省略」の機能をしている。(52) の「あのね」は留守電や電話の場合、境界を示す役割をし、(53) の「あの」は「どういうコースがお望みかな」と「半日岡山観光は」の間に、「倒置」関係があることを示している。

(c) 対人関係を表すフィラー (依頼、前置き、言いくさ表明)

(54) 県北の製材所 マー アノー 奈義の アノー ×× (名字) さんおられるんで... あんまりいわないようにしようと思いますけど あんまりソノ いい木が採れないのは実際そうだと思います。(山根 2002 : 71 【講演】)

話し手の心的態度を表すフィラーは対人関係を調整する役割を果たしている。主な機能は、聞き手に対する依頼や言いくさいことを表明し、後で来る話を先に聞き手に臭わせる前置きの機能などがある。

5.4.3 「あの」しか使えない場合

フィラーの「あの (一)」は「あれ」や「あら」とは違って、適当な発話形式を検索する間に、発話権の保持のために音声化されるものである故、独り言では生じにくいと考えられる。田窪 (2002 : 197) も「あの (一)」など、対象が同定されているがそれに対する適切な言語形式が思い浮かばない時に発せられる言い淀みは、独り言では必要ないとしている。

「あの (一)」の基本的用法について、定延・田窪 (1995) は、話し手が言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作を行っている際に用いられる。具体的には、名前の検索と、適切な表現の検討に二分されるといふ。その中で「あの一が対応するのはあくまで、心的データベースに定まっている概念(モノ)から発話形式を検索する心的操作である。その点において「あの (一)」の機能は、指示詞「あの」の機能と類似、連続していると述べている (定延・田窪 1995 : 83、下線は筆者)。「あの」の拡張は以下の通りである。



図7 : 「あの」の拡張

定延・田窪 (1995) は (a) 依頼、(b) 相手の明らかなミス指摘、(c) 相手の発話の遮りといった表現に「ええと」と「あの」が置き換えられないことを指摘しているが、この種の「あの」は「この」「その」に置き換えられないことがわかる。以下の例 (69) ~ (71) は定延・田窪 (1995) を一部修正したものである。

(a) 依頼

(55) [#この (一) / #その (一) / あの (一)] 窓を開けてもらえますか。

(b) ミスの指摘

(56) 先生、[#この (一) / #その (一) / あの (一)] ズボンのチャックが開いていますよ。

(c) 発話の遮り

(57) [#この (一) / #その (一) / あの (一)] 田中さんからお電話ですが。

定延・田窪 (1995) では、「この (一)」「その (一)」「あの (一)」をすべて言い淀みに分類しているが、筆者は (a) ~ (c) の使い方を呼びかけの「あの (一)」¹⁰と見て、時間稼ぎのための「あの (一)」と分ける必要があると考える。後者を言い淀みの「あの (一)」と呼ぶことにする。

呼びかけの「あの (一)」は主に人を呼びかけしたり、注意を引いたりする時に用いられる¹¹。現場指示の時、話し手と聞き手にとって遠い所にある物事であるかのように対話の時の話し手と聞き手の共通経験 (共同の縄張り) の延長であると考えられる。

(58) 「あの一、すみません、トイレはどこですか。」

(59) 「あの一、恐れ入りますが、お名前は」

それに対し、言い淀みの「あの (一)」は話の開始時や途中で、次の言葉へのつなぎとして用いる語である。いわゆる、聞き手に対して発話権を獲得するのが目的である。

(60) 「そうして、あの一、…」

言い淀みの機能は「この」「その」「あの」のいずれもあるが、聞き手に呼びかけることができるのは、「あの」だけである。

とくに依頼、質問など、聞き手のプライドを傷つける可能性のある談話では、話し手と聞き手の共通領域を作ることによって、相手に一体感を与えることができ、結果的に話を和らげる役割を果たすことになる。山根 (2002) の「対人

¹⁰「大辞林」第二版ではフィラーと呼びかけが分けられているが、「大辞泉 (デジタル大辞泉)」と「広辞苑」第五版では両者が未分化のままである。

¹¹感動詞「これ」にも人の注意を引くという呼びかけの使い方があるが、「これ」は「聞き手の注目を話し手の縄張りを引き込む」という強い意志を表すのに対し、呼びかけの「あの (一)」は「聞き手の注目を話し手と聞き手の共同領域に引き込む」のである。そのため、「あの (一)」は「これ」より、発話を和らげ、共感を呼ぶことができる。

関係」機能と部分的に一致する。

フィルターの「あの (一)」と呼びかけの「あの (一)」を区別するなら、図7は以下のように修正する必要がある。

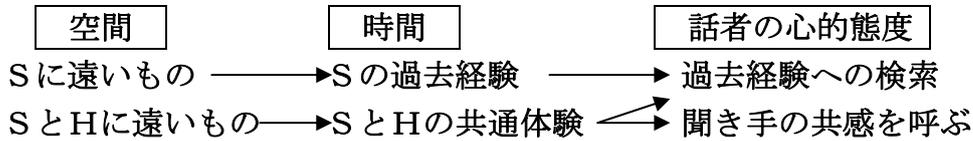


図8:「あの」の拡張(修正)

5.4.4 フィラーと指示詞の連続性

5.4.2 から主に指示機能が曖昧なコソアの例を見てきたが、接続詞と同じように、フィルターは指示詞(文脈指示)と使い分けがあいまいな例も少なくない。

(61) 脳は、目や耳などからだの五感から様々な情報を認識します。そしてその情報を処理判断し、からだの各部に指令が送られ、からだ(筋肉)が動きます。この、認識から運動までの一連の流れを総合的に行うことをコーディネーション能力といいます。(毎日新聞 2007/12/12)

(62) A:「そうね。ただ、今の雰囲気が妙になじむというか、なんとなく懐かしくもあるのよね」

B:「あ、わかります。その、何年か前までの弱かったころの雰囲気というか」(毎日新聞 2007/9/15)

(63) このDVDでダライ・ラマが語っているのは、般若心経についてである。法事などの際には、多くの日本人が耳にするあの、“カンジーザイボサツギョウジンハンニヤハラミタジショウケンゴウウンカイクウドイツサイクヤク”というお経。(毎日新聞 2008/1/21)

例(61)では「この」が独立して存在するように見えるが、普段文章における文脈指示と見なされてよいであろう。先行文脈全体を一つの「こと」と見て、照応詞「こと」の前に長い修飾語が来る場合「認識から運動までの一連の流れを総合的に行う」このこと」から「この」を修飾節(句)の前に移動することができる。つまり「この“認識から運動までの一連の流れを総合的に行う”こと」に置き換えられる。

例(62)では、もしBを「その雰囲気」と言うなら、間違いなくAの発言中の「雰囲気」を指しているが、指示詞の「その」と照応詞の「雰囲気」の間に長い修飾語が来る場合、「その」が独立して、フィルターとして読み替える可能性も高くなる。

例(63)の場合も指示詞「あの」と具体的指示対象「お経」の間に長い修飾語が介在するときよく見られる例である。

つまり、「この／その／あの＋N」は「この／その／あの＋（修飾節）＋N」になれるが、修飾節（句）が長ければ長いほど、「この／その／あの」が遠く離れている名詞に対する指示力も落ちていくと考えられる。

そこで、「この」「その」「あの」の後に来るはずの名詞句を話し手が発話当時まだ整えていない場合、自然にフィラーの「この＋φ」「その＋φ」「あの＋φ」の形になるのではないか。逆に言うと、「この」「その」「あの」を用いることによって、時間を稼ぐことや発話調子を整えることができるのである。

- (64) 話し手に対する役割：適切な表現形式を検索する間を取る。
聞き手に対する役割：後に話したいことがあると予告する

- (65) サンコン J r : 「松本君、マジック・サムのあれっていいのん？」
トータス松本 : 「ん！？あれって、どれ？」
サ : 「あの、ほら、『ブラック・マジック』やなくて……、なんやったっかな……、タイトルがわからんなあ」
ト : 「……」
サ : 「ほら、ジャケットがサイケデリックな感じのあるじゃないですか」
ト : 「……ああ、『ウエスト・サイド・ソウル』かー！」
サ : 「そう！それ、それ！」（毎日新聞 2008/2/1）

例 (65) のサンコン J r は明らかに「あの『ウエスト・サイド・ソウル』」と言いたかったが、急に思い出せない故、「あの」を用いて、まず自分の過去経験に適切な形式を検索する意図を表し、さらに聞き手に事柄の存在を予告し、助けを求める効果も期待している。

指示詞の「この」「その」「あの」は現場指示の指示機能から文脈指示の照応機能を介して、言い淀みへ変化していると考えられる。このような派生関係がある故、「この (一)」「その (一)」「あの (一)」のどれも「すらすら言えない時、時間稼ぎ」の機能を有しているが、言い淀んだ時、適切な発話形式を検索する場が違っている。

「この＋N」で表れされるのは「話し手の縄張りにある物事」である。記憶階層から見れば、現場認知に関わっている。指示機能が明確な「話し手の領域内の物事を指すこと」から、指示機能が曖昧な「話し手の領域内で物事を検索すること」に機能が変化する故、共通的な「話し手の縄張り」が抽出されうる。

「その＋N」で表れされるのは「話し手の縄張り以外にある事物」である。記憶階層から見ると、まさに非現在と非過去の短期記憶である。指示詞が「話し手の領域外の物事を指す」機能から言い淀みの「話し手の領域外を検索する」機能に変化する故、「話し手の縄張り外」の領域を抽出することができる。

「あの＋N」で表わされるのは「話し手の過去経験にあるN」である。記憶階層から見ると、話し手の過去経験は長期記憶に属する。指示詞の機能が「話

し手の経験した物事を指す」からフィラーの「話し手の経験の中で物事を検索する」に変わっている故、「話し手の過去経験」を抽出することができる。

(66) この(φ)：話し手の縄張り(現場認知)を検索する。

その(φ)：話し手の縄張り外(短期記憶)を検索する。

あの(φ)：話し手の過去経験(長期記憶)を検索する。

以上のことを図式化すれば、以下の通りになる。

①感動詞「この」



②感動詞「その」



③感動詞「あの」(図8を再録)

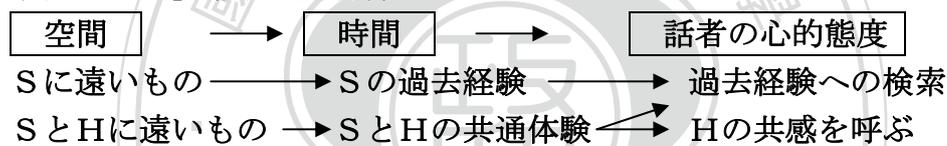


図9：感動詞「この・その・あの」の意味拡張

5.5 おわりに

5.5.1 認知言語学との関わり

本章で論じてきた指示詞から感動詞への拡張は「抽出化¹²⁾」による文法化であると考えられる。

感動詞の「これ・それ・あれ」はそれぞれ、話し手の縄張りに関わる点で現場指示と連続している。

まず、「これ」は「聞き手の注目を話し手の縄張りに引き込む」機能を有する。つまり「話し手の縄張りに入る」という方向性が抽出される。

話し手の縄張り内に引き入れられることによって、最終的に聞き手が話し手の言いたいことに気付く。話し手が「呼びかけ」、「命令」、「叱責」などの意志を、聞き手に強く伝達できるわけである。

「それ」は「話し手の縄張りから出る」という「これ」と正反対の方向性が

¹²⁾ 抽出化の定義は日野(2001)に従い、「もとの意味のA、BからBのみ抽出される意味変化」とする。具体的な例は「太郎は屋上に上がった」と「太郎が立ち上がった」のように、動詞の「上がる」から補助動詞「-あがる」になる時、「上へ」という方向性を抽出することができる。

抽出される。第三章でも言及したように、「話し手の縄張り以外」の領域はさらに「聞き手の領域」と「曖昧な領域」に下位分類することができる故、「それ」が担う機能は「聞き手に動作発動を促す」と「話し手自身の動作発動を促す」とに大まかに分類することができる。

「あれ」は「話し手の過去経験と矛盾する感嘆や驚き」を表す。そのため話し手に遠く離れている方向性が抽出されるのである。

フィラーの「この (一)」、「その (一)」、「あの (一)」も話し手の縄張りに関わるが、文脈指示用法から派生してきた故、抽出された縄張りは空間ではなく、時間を表している。

「この」=話し手が近い時間（現場認知）を抽出する故、言い淀んだ時に現場で検索することを意味する。

「その」=話し手に近くない時間（短期記憶）を抽出する故、言い淀んだ時に前後文脈で検索するのが基本的である。

「あの」=話し手にとって遠く離れている時間（長期記憶）を抽出する故、言い淀んだ時に過去の経験を検索することを意味する。

5.5.2 コソアを含む感動詞の意味拡張のまとめ

指示詞から感動詞への意味拡張は「空間」から「時間」へ、更に「話し手の心的態度」を反映する一方向をなしていることが分かる。

表 10 : コ系感動詞の意味拡張

	空間	→	時間	→	話者の心的態度
これ	Sに近い場所 Sを含む現場				Sの縄張りに引き込むことによって、呼びかけ、注意、非難を表す
この	Sに近い場所		Sを含む現在 (現場認知)		言い淀んだ時の現場での検索

表 11 : ソ系感動詞の意味拡張

	空間	→	時間	→	話者の心的態度
それ	Sに近くない場所 【融合型】				Sの動作を促す
	Hに近い場所 【対立型】				Hの動作を促す
その	Sに近くない場所		非現在・非過去の文脈 (短期記憶)		言い淀んだ時の短期記憶への検索

表 12：ア系感動詞の意味拡張

	空間	→ 時間	→ 話者の心的態度
あれ	Sに遠い場所	Sの過去体験	過去体験に矛盾する詠嘆と驚異を表す
あの	Sに遠い場所 【融合型】	Sの過去体験	言い淀んだ時の長期記憶への検索
	SとHに遠場所 【対立型】	SとHの共通体験 (長期記憶)	SとHの共通の領域を作ることによって共感を呼ぶ

